

Title	<學界動向> 隋唐帝國をどう考えるか
Author(s)	谷川, 道雄
Citation	東洋史研究 (1952), 12(2): 171-176
Issue Date	1952-12-25
URL	http://dx.doi.org/10.14989/138960
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

隋唐帝國をどう考えるか

谷 川 道 雄

一

内藤虎次郎博士の「中國近世史」(昭二二)は、博士の大正九年の講義であるが、現在の研究者にとつてもきわめてふかい示唆に富む名著である。この書の初めに次のような一節がある。「かくの如く、隋の文帝、唐の太宗の如き時弊を知る明ある君主は、貴族政治の不都合なることを考へて居つたので、上述の如き種々の政治改革の手段を計畫採用したのであるが、それらは何れも改革の功を奏せず、改革は却てこれら君主の考へなかつた原因から、意外の結果として現われたのである。これが即ち中古と近世との境目の歴史であつて、唐はこの意味で研究しなければならぬ」(頁二二)。ここでいう「上述の如き種々の政治改革の手段」とは、科擧制、均田制、府兵制などであつて、隋・唐の君主は之らで南北朝以來の門閥階級を抑壓しようとしたが、決定的には抑えることが出来なかつた。したがつて、隋唐帝國は君主權の強化という面からみて南北朝の門閥政治から宋

以後の君主獨裁政治への過渡的段階を構成する、というのが博士の所論である。このような規定は今日までの研究によつて實證されて來たし、また之からもますますその正しさが證明されてゆくだろう。しかしながら、他方ではこの規定を一層具体的にし豊富にしてゆかねばならない。こういう觀點からここ數年間における隋唐史研究の成果をかんがえ、さらに問題の所在を明らかにしたいとおもう。

二

隋唐帝國に關する最近の研究のうち、先づどうしても見のがすことのできないのは、鈴木俊氏の諸勞作であろう。鈴木氏は「唐代均田法施行の意義について」(史淵第、五〇輯)、「宇文融の括戸について」(和田博士還曆記念、「隋末の亂と唐朝の成立」(史淵第、五三輯)など一連の研究を出しておられる。この三つの論文を中心として問題の所在を明らかにしてゆきたいとおもう。最初の「唐代均田法施行の意義について」は、均田制に關するかつての氏の所論(「唐の均田制と租庸調

制との關係に就いて」^{東亞八}、「敦煌發見唐代戶籍と均田制」^{史學雜誌四七七}（參照）を修正補足しながら展開されたものである。すなわち、鈴木氏は之までの唐の均田制を、その施行は規定どおり行われず「有名無實で、強いてその意義を求めれば、單なる土地所有制限策にすぎない」と評價されていた。しかしこの新しい論文では、たんに均田制施行が規定どおりであつたかどうかを論ずるだけでは、この制度の積極的な意義は明らかでないとし、均田制を一つの現實の支配体制としてとらえねばならないという反省から出發されている。敦煌の戶籍や通典の記述からも明かであるが、一戸當りの既受田額はその應受田額よりも少い。したがつて口分田の收授は殆ど行われなかつたとおもわれるが、實際は一丁當り百畝以下の土地でも生活が維持できたのであり、一丁の給田百畝というのは儒家の理想であつた。租庸調もこのような百畝以下の農民の擔税力を考えたものであつて、決して無理なことはなかつた、こうして均田法をたんに形式的なものと考えるのは行きすぎで、それは一丁の最高額を百畝とした土地所有制限策であり、ここにこそ均田制の重要な意義があると結論されている。したがつて、鈴木氏において唐の均田制は（北魏以來のそれも含めて）、漢の限田制、晋の占田制を繼承する國家の土地所有制限策と理解されるわけである。もしそうだとすれば、このような土地制度を施行した唐朝はどのようにして生れてきたか、また均田法を施行する唐朝と之により抑壓を受ける豪族とはどのような關係にあつたか、この二つが次の課題となつてくる。こうして前者は「隋末の亂と唐朝の成立」で、後者は「宇文融の括戸について」によつて、それぞれ説明されてゆくのである。

唐朝の成立について、鈴木氏は次のように論旨を展開される。隋

末の諸反亂は最初は地方の小地主、小役人、ボスなど不平分子の類が指導者となつて、當時高句麗遠征により飢餓に瀕していた農民たちをかり立てた、比較的小規模な反亂であつた。それは掠奪、破壊本位であつたので、地方の豪族・門閥は自己防衛のために、武力を以て動き初め、ついに全國的な内亂となつた。こうした自衛のために最も有力な軍隊をもつたのが太原の李淵であり、豪族門閥は之に保護を求めた、ここに彼らに優越する強化された權力として唐朝の成立するゆえんがある。云々。

「しかし唐の統一には勿論大小豪族の力によるところ多く、従つてそこに豪族勢力發展の傾向があり、對豪族策の生ぬるさ、不徹底さがあつた。唐一代を通じて問題となつた國家權力と貴族、豪族勢力との衝突はかゝる事情にもとずくものであらう」（「隋末の反亂と」）。こうして、唐朝におけるこのような衝突の著名な例として、宇文融の括戸がとり上げられる（「宇文融の括戸」）。宇文融の括戸は、地主たる豪族（彼らはまた貴族であり官僚である）の大土地所有と農民の逃亡が、均田体制の維持を困難にしたことによつて行われたものであることを、通典と新舊兩唐書並びに唐會要との立場の比較から説かれた。そして之につけ加えて、唐の權力が強力である間はこのような對策が實行されたが、その權力の弱体化にともなつて均田制の廢止、兩税法の成立を見たとのべておられる。

最初にもどるが、鈴木氏が、均田制は社會の實狀と遊離した形式的存在であると規定された舊論をあらためて、これをその現實的意義からつかもうとされたのは、全く正しい觀點と考えねばならない。しかしながら、均田制をたんに土地所有制限策と結論されたことに、一つの飛躍があるようであり、必ずしも現實的なつかみ方では

ないようにおもわれる。何故ならば、氏が「均田制の目的は、國家が最高の地主として、その土地を一般農民に分給し、その代償として地代たる租庸調を彼等から徴收し、これによつて國家財政の基礎を安定するにある」(前掲論文)。この規定(國家地主説には必ずしも賛成できないが)を具体化することが、實は均田体制をその本質において把握する途ではないだろうか。鈴木氏の論證では、土地所有制策であることの積極的な説明が見られないが、この説の當否は、全く租庸調制の實体の究明にかかつているといわねばならない。それは國家と農民との具体的な關係からくるのであつて、決して國家と官僚(豪族)との對立を基本とするものではないとおもわれる。

唐朝成立の問題も、このような視點から明確にする必要があるとおもうのである。氏もいわれるとおり、李淵を中心として組織された官僚集團は、隋末における地方勢力、農民の諸反亂のはげしさによつて始めて成立するのであつて、ここに李淵勢力の意味がある。すなわち、あのようににはげしい反亂にあり、倒壊せねばならなかつた隋朝勢力の不合理さは、要するに、その農民支配の不合理さに外ならない。これをどう考えるかが問題である。また、この内亂の中から生れた李淵の勢力は、隋朝權力とちがつて、何らかの合理性をもつていなければならないが、それは一体何であるか。

小笠原正治氏の「隋朝末期の動亂における官僚群」(史潮)は、右の二點にふれるところがあるので、ここに紹介しておきたい。小笠原氏は李淵の官僚集團を分析し、豪族的なたての統合原理と官僚的なよこの統合原理とのからみあつたものだとし、さらにこのような官僚集團の二重の性格は、隋までの官僚の「朝に仕えては官僚、野に在つては豪族という二重の性格」より來ると述べられている。

ところが、北朝以來の政策を繼承して、隋は官僚の豪族的性格を拂拭することにとめた。自己の派閥の官僚を重用して之を強力に斷行したのが煬帝であり、ここに反煬帝的官僚は高句麗遠征への地方豪族、農民の反抗と結合し、李淵による唐朝權力の成立を見るところが氏の論旨である。

ここで疑問におもうのは、第一に隋朝において官僚の豪族性が否定されるのはなぜかということであり、第二に、これに對する官僚層の抵抗が唐朝を建設したとすれば、唐朝の新しい意義はどこにあるかということである。これらの根本的な課題をとくかきは、この論文において指摘された官僚の二重性ということにあるのではないだろうか。このことをもう少し考えてみたい。

竹田龍兄氏は「唐代士人の郡望」(史學二)のなかで、唐代の貴族が、何地の何某というように郡望を稱し、碑誌、行狀などに好んで用いたことを挙げられたが、さらにこの郡望は現住地でもなければ本貫でもなく、もつと古い父祖の地であらうとされている。唐代の貴族たちは、いろいろの原因から、はやくこの郡望をはなれ、あるいはさらに自己の本貫をも去つて、京師に移り住んだのである。このように貴族たちが郡望を稱する土地からはなれ、本貫をはなれてゆくのは、一体なぜだろうか。右の論文では、晋の南渡・安史の亂などの動亂、仕宦の都合、科擧制の創始等々にその原因をもとめているが、さらに之を統一的に考えるとき、貴族たちの官僚制への寄生化が想像できるとおもう。そうして、それは、貴族たちが自己の權力の基礎である土地・人民の支配を、どういうかたちで貫徹し、またその支配形態がどう變貌したかということから考えてゆかねばならないのではなからうか。つまり、南北朝時代の貴族はその故地

における自己の私的土地所有・私的人民支配を、そのまゝ直接に權力の基礎としており、之が郡望なるものの實體であつたとおもわれるのであるが、隋唐時代になると、彼らの土地所有、人民支配は、強力な公權を以て支えねばならなくなる。ここに官僚制の形成されるゆえんがある。

それでは、このような變化をもたらしたものは何かと云えば、先づ第一に貴族たちとそれに隷屬する部曲、奴婢との相剋、第二にこのような私經濟を外側から守らされていた一般農民の抵抗が考えられるとおもうのであるが、之はたんなる見とおしにすぎない。しかし要するに、この時代の基本的な支配隷屬關係のあり方を具体的に検討することが、何よりも大切だとおもうのである。隋唐官僚の二重性とは、このような歴史的な位置づけによつて始めて成立するとおもうし、こうして短命であつた隋朝、三世紀にわたる唐朝の兩權力の性格も始めて明らかにするのだらう。隋末の反亂は、こうした貴族の支配体制の轉形期に激發し、またこれを推進したエネルギーとしてとらえねばならないとおもう。

したがつて、均田制もたんに土地所有制策としてでなしに、貴族たちのつくり上げた國家權力と農民とが具體的にどのような關係にあつたかということが究明されなくてはならない。なるほどそれは土地所有制策という意味もあつたであらう。しかしそれだけでは均田制を、かつての限田や占田より區別することが出來ず、結局均田制の歴史的意義を見失うことになるのではないだらうか。

鈴木氏は、均田制を貴族（豪族）及び農民への土地所有制策とされているのであるが、このような考えは、この時代の基本的な關係を國家對貴族・農民とされていることにもとづくのであらう。し

たがつて、宇文融の括戸は、前者の後者に對する強力な抑壓としてとらえられ、その失敗後律令体制の決定的な破綻がくるが、それは後者が前者を凌駕することによるとされていようである。しかしながら、こうした律令体制の破綻が、ついに貴族階級の没落を結果するものであるとすれば、この論理には矛盾がないだらうか。内藤博士は、「門閥の没落は、太宗の政策などからではなく、他の原因から自然に行われるに至つたが、その時は唐の滅亡する時であつた」（『中國近世史』）といつておられるが、貴族階級は唐帝國と運命を共にしたのであり、唐代社會の基本的な關係は、唐朝・貴族對Xであつた。このXが何であるかが問題である。次にこのことについて述べたいとおもう。

唐帝國が崩壞し、貴族階級が没落したのは、その下にあたらしい社會關係が生れていからである。内藤博士は之を「近世」とよばれたが、要するに、それが唐代社會のなかからどのようにして芽生えてくるか。之が隋唐帝國史の第二の課題である。ところで、このあたらしい社會關係は、佃戸制とか近世的耕作制とかいわれる私的土地所有制を基礎としている。しかし、このような私的土地所有制はそのままで自己を實現することができない。そこにいろいろと複雑な政治過程が生じてくるわけである。この政治過程についてのべたのが、堀敏一氏の「唐末諸叛亂の性格」（『東洋文』）であるが、堀氏の論旨は次のとおりである。隋唐帝國の官僚制は貴族政治の歸結點であるが、この官僚機構の基礎が動搖し始めると、官僚制内部の權力争いはげしくなる、こうして天子の個人的な恩寵を受ける寵臣が出現する。このような段階では家柄は問題とならず、成り上り者が權力をにぎることができるようになる。安祿山もその一人で

あり、彼の反亂は玄宗に對する失寵から起つた。こうして内亂後は強藩が華北一帯に割據するが、しかしこれらの藩鎮内部の体制は、恩寵によつて結合されたこの時期の官僚制を本質的に否定しないだけでなく、それ自身藩帥と部下との個人的結合關係によつてなりたち、さらに藩帥は中央とつながっている。このような状態は軍隊内部の下剋上によつては根本的な變革を見ず、黃巢の亂という大規模な民衆の反亂が唐朝權力とまつころからぶつかることによつて始めて貴族階級の没落が可能となる。

ここで明らかとなつたのは、安史の亂にしても、亂後の諸藩にしても、唐朝權力の本質的な對立物でなく、むしろその權力支配の最高の段階から生み出されたものであるという點である。そして本當に權力を打倒した原動力は黃巢らのひきいた農民たちにあつたことが説かれてゐる。しかしここでさらに問題となるのは、たとえば藩鎮の後向きの面だけが強調されて、黃巢の亂を生み出した前提としてとらえられていないことである。あるいは安史の亂も、たんに安祿山の失寵とばかり云えぬ社會的原因があるのでなかろうか。

「しかしこういう生産關係の變化均田制から佃戶制への影響はその上に營まれてゐる人間の生活の諸面においては、極めて多様な豊富な形態をとつて現われるのであつて、生産關係の變化自体からはその影響の仕方を説明することはできないのである。安史の亂が失寵の危惧から起つてゐるということは、恩寵や個人的結合が當時の社會においては重要な役割を果してゐたからであつて、この様な性格の社會においては、個人の動きが重大な社會的な事件をひき起すのである」という堀氏の考え方には多少の疑問を抱かざるをえない。なるほど生産關係が一方的に歴史のすべてを決定するのではな

いが、「個人的結合」による官僚制が、この時代の最も基本的な支配隸屬關係の變化からどのようにして生み出されたかということや、このような支配体制のなかで新しい社會關係が成長してゆくさまは、やはり明らかにしなければならぬとおもう。したがつて、下剋上という現象も、唐朝官僚制を否定しないものとして概念的に規定するよりも、むしろ徐々になんぞに否定してゆくものとしてとらえる方が肝心なのではなかろうか。そうしてそれらが、黃巢の亂への諸條件を直接につくり出したのであり、ここに唐代政治史の基本的な課題が存在する。さきに、唐代社會の基本關係は國家・貴族對Xだと云つたが、Xはもちろん農民を中心とする被支配者たちであるけれども、それはたんに被支配者であるというだけでなく、次第に組織化し、新しい社會秩序を形成して行つたのである。それは、堀氏の指摘されたようなこの時代の部曲的假子的隸屬關係にも、あるいは自衛團である義軍、群盜といわれるような抵抗組織などにも、それぞれ表現されてゐるし、事によると、團結兵なども天降りのではあるが、そのあらわれなのかも知れない。

こうして、被支配者がただの被支配者でなくなり、自分たちの世界を現實に打ちたててゆくところに、唐朝官僚制の根本的な動搖が生じてくる。それは均田制から佃戶制への經濟的變革と直接にむすびつてゐる。それは、唐朝の權力支配がもはや現實性をうしないつつあることであり、このような危機にさいして、支配階級はいろいろな對應の仕方をしなければならなくなる。しかも、これは尖鋭になつた權力をめぐる官僚間の黨争を背景として行われるわけである。こうして勝利者は種々の政治的・經濟的特權を獲得し、敗北者は没落してゆく。貴族の大地所有（莊園）といつても、決

して貴族全体がひとしく行つたわけではなく、おそらく一部の權勢者たちのかちえた勝利の結果であつたであらう（唐末京畿附近の莊園は中官たちによつて獨占されていた）。あるいは安祿山などは、河北一帯の民衆や北方民族を利用したかたちで、自分の永遠の榮華をかつとろうとするわけである。また、權力全体としては兩税法への轉換を餘儀なくされる。

しかし、このようなさまざまな方向に一致して見られることは、何れもあたらしい社會關係に依存的・寄生的であるという點である。したがつて、權勢をにぎつた官僚や節度使が、どんなに財富や武力をわがものとしてゐるように見えても、その把握の力は意想外によわいわけである。この點の具體的な理解はきわめて重要だともおられるが、今後の研究にまたねばならない。

右のような官僚階級の一般的あり方において、没落貴族の一部には、自己の苦境を通じて民衆の世界にふれた人々もあつた。杜甫などはその代表的人物ではないかとおもわれるのであるが、彼のすぐ

れた藝術も、ようやく世界を自分たちの世界と變革しつつあつた民衆の成長を背景とせずには考えることができない。最近の杜甫研究（吉川幸次郎氏「杜甫私記」第一卷・齋藤勇氏「杜甫」・影山剛氏「李白と杜甫」（毎日新聞社「人」）も、杜甫の社會史的背景についてはよくのべているが、しかしそのとらえ方は、逆境に投げこまれた杜甫が、民衆の慘苦にふれてそのすぐれた詩を創造したというような消極的なとらえ方である。文學史という點から見てもここには大きな問題があるようにおもふ。

以上、隋唐帝國の成立はどういう意味をもつか、この權力はどのようにして否定されてゆくか、この二つの點から最近の研究を紹介し、問題を明らかにしてみた。しかし最近の成果はここにとり上げたものだけではないし、またとり上げた研究の紹介や批判の仕方にしてもきわめて恣意的であつて、學界動向とよぶにふさわしくない内容となつて了つたことをふかくおわびしたいとおもう。

昭和二十七年度文部省科學研究費

總合研究課題（關係分）

支那哲學の問題史的研究
儒佛道三教交渉の基礎的研究
中國民間宗教の歴史的研究
史記の構成史料に關する基本的研究

重澤俊郎
塚本善隆
福井康順
三上次男

カラホト附近出土漢代文書の整理並にそれによる

漢代史の綜合的研究

森 鹿 三

中國產業史の研究―歷代食貨志を中心として―和

田 清

內陸アジアの綜合的研究

江 上 波 夫

中國の變革期における社會・經濟・文化の

相關關係の研究

倉石武四郎

現代中國語彙の研究調査

高 倉 克 巳